



能登やさしいこめづくり情報

令和3年6月
能登米振興協議会
能登米生産者協議会
能登南部営農推進協議会
J A 能登わかば

早生出穂編

穂肥の適期・適量施用で、収量・品質を確保!!

1 生育概況と当面の管理

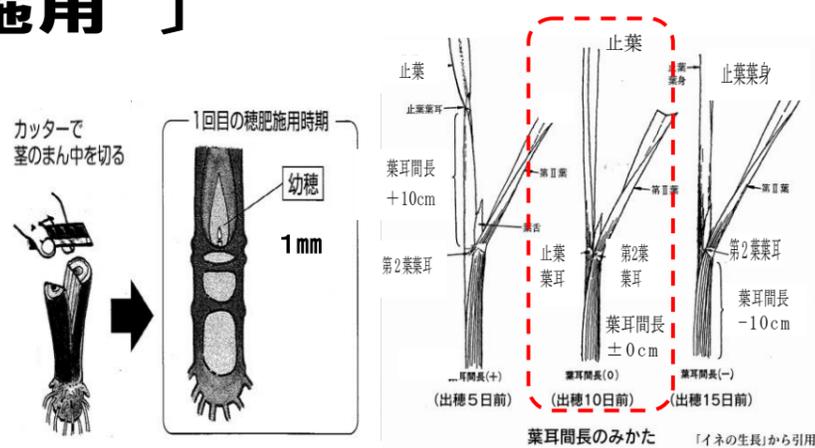
- ・本年は、5月の田植え以降、気温は平年並みで推移しましたが(七尾市:平均気温17.8℃(平年+0.5℃))、5月下旬の日照不足のため、生育は遅延、分けつの発生は停滞しました。
- ・現在の茎数は、ゆめみづほは平年並、コシヒカリは平年より少なく、ひやくまん穀は平年より多くなっています。
- ・葉齢から推測する生育の遅速(6月23日現在)は、ゆめみづほは平年より1日早く、コシヒカリは3日遅くなっています。
- ・中干しは、早生品種では6月30日頃まで、コシヒカリでは7月10日頃まで、ひやくまん穀では7月20日頃まで、引き続き継続し、稲体の健全化を図りましょう。
- ・今後は、①「適切な穂肥の施用」、②「出穂まで1か月間の飽水管理」、③「3回の仕上げ防除の徹底」に努めて下さい。

【参考】生育調査結果(6月23日現在)

品種	草丈 (cm)			㎡当たり茎数(本/㎡)			株当たり茎数(本/株)			葉 齢 (枚)		
	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%
コシヒカリ	43.8	82	97	390	71	77	21.9	69	86	9.6	96	97
ゆめみづほ	48.1	94	113	557	117	105	30.5	113	105	10.5	102	101
ハナエチゼン	46.3	90	105	535	107	107	27.9	100	110	10.6	95	103

2 出穂予測と穂肥時期の目安 [適切な穂肥の施用]

- ・葉齢展開から推測される出穂期は、「ゆめみづほ」は7月23日頃、「ハナエチゼン」は7月23日頃で、平年と同じ頃になる予想です(6月23日時点)。
- ・穂肥は、「必ず」幼穂長及び葉耳間長を確認し、出穂時期を見極めた上で、実施しましょう。



(図)1回目の穂肥施用時期

(図)2回目の穂肥施用時期 (左から出穂5日前、出穂10日前、出穂15日前)

分施肥体系での穂肥

- ・生育過剰なほ場や葉色が濃いほ場では、1回目の穂肥時期は遅らせず、量のみを減らして施用してください。
- ・1回目穂肥が施用出来なかった場合でも、2回目の時期の穂肥は必ず施用して下さい(稲体の消耗を防ぎ登熟向上を図る)。

<注意> 追肥を1回目の時期の1回のみで終わらせないこと

品種名	肥料名	回数	時期(出穂前日数)	施用量	備考
ハナエチゼン	秋ゆたか	1回目	6月30日頃(23日前)	15~20kg/10a	1回目の施用基準:幼穂長1mm(上図参照)、葉色4.0 2回目の施用時期:葉耳間長±0cm(上図参照) <注意> ・葉色が濃い場合(葉色4.0以上)は施用量を3割程度減じてください。 ・地力がなく秋落ちしやすいほ場は、BBLP秋ゆたかを施用してください。
		2回目	7月13日頃(10日前)	20kg/10a	
ゆめみづほ	秋ゆたか	1回のみ	6月28日頃(25日前)	35~40kg/10a	
		1回目	6月30日頃(23日前)	15kg/10a	
		2回目	7月13日頃(10日前)	20kg/10a	
	BBLP 秋ゆたか	1回のみ	6月28日頃(25日前)	30~35kg/10a	

※葉色が濃い場合(葉色板 4.0 以上)は施用量を3割程度減じて施用して下さい。

基肥一発肥料体系での追加穂肥

★ 暑さに負けない! 「ゆめみづほ」登熟向上対策!! ★

- ・基肥一発肥料では、基本的には追肥の必要はありませんが、本年は向こう1か月の気温は平年並と予報(6/17 発表)されており、①登熟期の高温による栄養凋落の防止 と ②収量の向上のため、以下を目安に上乘せ追肥に取り組んでみましょう。

品種名	追加穂肥の判断		追加穂肥の施用		
	判断時期(出穂前日数)	判断基準(葉色)	施用時期(出穂前日数)	肥料名	施用量
ゆめみづほ	7月8日頃(15日前) (幼穂長4cm・葉耳間長-10cm)	葉色板5.0未満 (葉色が濃い場合は施用しない)	7月13日頃(10日前) (葉耳間長±0cm)	BB 秋ゆたか	7~10kg/10a

(注意!!) 出穂予測は、あらためてホームページまたは各支店に掲示するので、ご確認ください

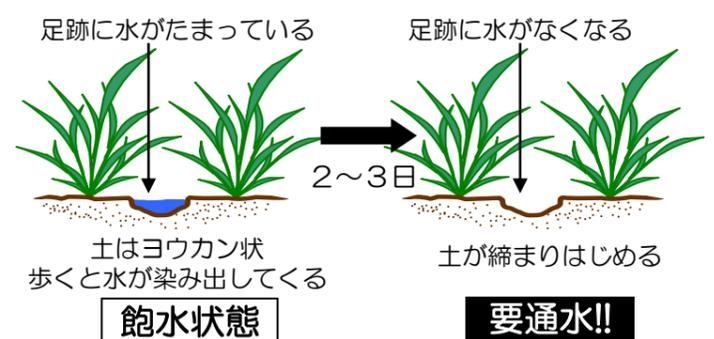
3 中干し終了後の水管理 [出穂まで1か月間の飽水管理]

- ・登熟期間の水稻の活力を維持するためには、根を健全に保つことが重要です。そのためには、適期の中干しに加え、中干し以降の水管理が大きく影響します。きめ細やかな水管理により登熟を向上させ、未熟粒の発生を防ぎましょう。

〔 飽水管理の徹底 〕
幼穂形成期(早生品種6月30日、コシヒカリ7月10日、ひやくまん穀7月20日)以降は、新しい根の発生が少なくなるため、中干し終了後は2~3日間隔を目安に通水し、飽水状態(右図)を保ち、根の活力維持を図りましょう。

- 1 通水は出来るだけ朝方か夕方に行いましょう(水田内の温度を上げない)。
- 2 集落や地域ぐるみで、計画的な水利用に努めましょう。

〔飽水管理〕とは・・・ほ場表面に水はないが、足を踏み入ると水が染み出てくるような水分状態を維持する水管理のことです。



次ページに続きます。

4 斑点米の発生防止対策 [畦畔除草・3回防除の徹底]

昨年度、中能登管内の斑点米による落等割合が10.8%(R1年産は6.9%)と非常に多くなっており、また、近年は大型で飛翔性のクモヘリカメムシが多発しており、斑点米だけではなく、米粒を不稔にさせて減収させる要因としても考えられております。そのため、**畦畔除草と3回の仕上げ防除**を実施し、収量も品質も良いお米に仕上げましょう。

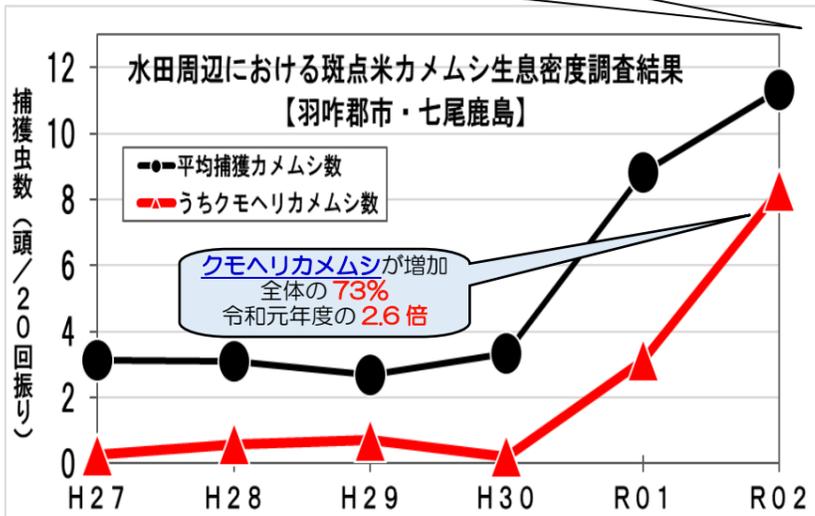
<斑点米カメムシ類>

【飛翔性】

【歩行性】



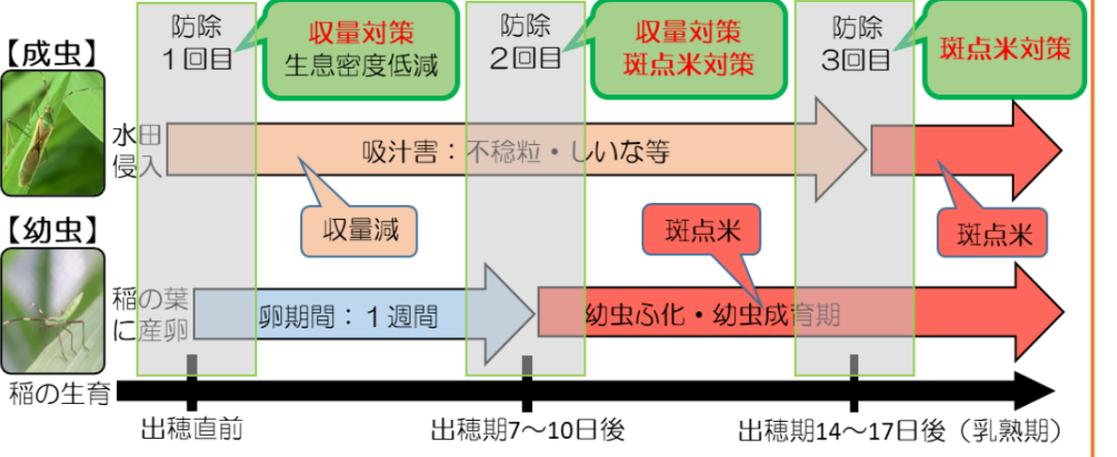
近年、クモヘリカメムシが急増中!



【クモヘリカメムシ対策】

対策①：6月中の畦畔除草でカメムシの生息数低減

対策②：3回の仕上げ防除の徹底（個人防除・無人ヘリ防除問わず）



◆ 畦畔除草 ◆

斑点米カメムシの生息密度を下げるため、7月10日頃までに地域・集落ぐるみで**畦畔や農道等の一斉仕上げ除草**を実施しましょう。

<一斉草刈り強化週間は7月4日(日)~7月10日(土)>

※ 7月中旬以降の除草は、斑点米カメムシを本田に追い込むこととなるので、基本的には行わないでください。やむを得ず、除草する場合は、**基幹防除の直前**に行ってください。

◆ 3回防除 ◆

基幹防除では、**出穂直前**と、**出穂期の7日後(穂揃期)**、**14日後(傾穂期)**の**3回防除が斑点米カメムシの被害防止に重要**となるため、必ず実施しましょう。

【出穂期】とは・・・

ほ場全体の40~50%が出穂した時期をいいます。

(1) 基幹防除

①粉剤体系：粉剤防除では防除効果を高めるため、風の無い時間帯で、散布後3~4時間は降雨がない日に散布してください。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	トレバリダビーム粉剤 DL 【2成分】	4kg	7月18~22日頃	出穂直前防除
2回目	いもち病、カメムシ類	ラブサイドキラップ粉剤 DL 【2成分】	3~4kg	7月30日~8月2日頃	出穂7日後頃(穂揃期)
3回目	カメムシ類	エクシード粉剤 DL 【1成分】	3kg	8月6~9日頃	出穂14日後頃(傾穂期)

化学合成農薬成分の数です。

②粒剤体系：粒剤防除は一人で散布でき、粉剤のような飛散(ドリフト)が少ないため、市街地等でも散布ができます。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	イモチエースキラップ粒剤 【2成分】	3kg	7月11~13日頃	出穂10~12日前頃(散布後4~5日の湛水)
2回目	カメムシ類	キラップ粒剤 【1成分】	3kg	7月30日~8月2日頃	出穂7日後頃(穂揃期)(散布後4~5日の湛水)

③液剤体系：液剤防除は散布に労力はかかりますが、安価なため、コストを抑えることができます。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	ビームエイトレボンブル + バリダシン液剤5 【2成分】	650倍・100L 1000倍・100L	7月18~22日頃	出穂直前防除
2回目	カメムシ類	エクシードフロアブル 【1成分】	2000倍 ・60~150L	7月30日~8月2日頃	出穂7日後頃(穂揃期)
3回目	カメムシ類	エクシードフロアブル 【1成分】	2000倍 ・60~150L	8月6日~8月9日頃	出穂14日後頃(傾穂期)

(2) 随時防除の実施

病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	摘要
稲こうじ病 墨黒穂病	Zボルドー粉剤 DL 【0成分】	3~4kg	【予防剤】常発地では出穂10~14日前に散布(出穂10日前以降は薬害の恐れがあるので散布しない)

【農薬の適正な使用について】ラベルに記述してある使用方法以外の使い方をすると法律(農薬取締法)で罰せられます。消費者に安心して安全な能登のお米を食べていただく気持ちをもって、農薬は正しく使用して下さい。